タイトル:「遼・金・西夏に関する総合的研究—言語・歴史・宗教—」(平成20年度第3回研究会)
日時:平成21年3月14日(土曜日)・3月15日(日曜日)
場所:京都大学文学部

1)
報告者名(所属):上川通夫(愛知県立大学)
報告タイトル:「尊勝陀羅尼と日本の古代・中世仏教」

尊勝陀羅尼をめぐって、日本の 8 世紀から 12 世紀の仏教史をたどり、古代仏教から中世仏教への転化の特徴を考え、同時代の日本史を捉える新視点を探る試みの一部とした。

尊勝陀羅尼を含む各種の陀羅尼が東アジア世界で盛行したことついては、よく知られている。近年では、尊勝陀羅尼経幢について、流行の中心たる五台山だけでなく、北宋・南宋や遼・金・西夏の遺例が広汎に収集・確認されている。ここでは、研究史の現段階に鑑みて、日本の尊勝陀羅尼について、史料に即して展開過程の概略をたどってみた。

『仏頂尊勝陀羅尼経』(683 年仏陀波利訳)の日本での初見は、天平 11 年(736)の写経帳簿であり(正倉院文書)、この頃から日本国家が中国仏教の全面導入策を採ったことと関係する。9 世紀にかけて、入唐僧の請来経典群中に諸種の訳本が含まれていた。悔過儀礼と共通の滅罪思想によって読誦政策がとられたが、尊勝陀羅尼経幢の展開はみられない。10 世紀後半には念仏などとともに、追善儀礼の一部に尊勝陀羅尼が唱えられることがあったが、貴族身分に限られる。11 世紀後半から 12 世紀初頭にかけて、高麗・北宋・遼・日本の海域に諸人混成の海商船が活動し、北宋や遼で盛行した一層呪術色の濃い密教の書物などももたらされ、刺激を受けた日本の権力中枢は密教重視の国家政策に大きく傾いた。尊勝陀羅尼の受容形態は一挙に展開し、尊勝陀羅尼読誦・尊勝法・如法尊勝法の三様が成立した。そのことと入れかわって、これまでの五台山憧憬の意識が後退し、国内聖地としての金峰山や熊野が浮上するなど、日本仏教の自立傾向が進んだ。

日本仏教の自立傾向は、尊勝陀羅尼の展開形態にも表れている。如法尊勝法なるアレンジされた尊勝陀羅尼儀礼の考案はその一つである。また、中国で盛行した尊勝陀羅尼経幢の日本での展開は僅少だったが、ここで卒塔婆・経塚という転形が生まれ、五輪塔・宝篋印塔・傘塔婆など諸形式へと発展していった。

日本列島の古代史から中世史への転換過程は、アジア仏教世界への参入から日本仏教の析出分離過程でもあり、尊勝陀羅尼をめぐる動向はその具体事例をよく表している。

2)
報告者名(所属):古松崇志(京都大学)
報告タイトル:「契丹・宋間の澶淵体制における国信使と外交儀礼」

一〇〇四年、契丹と宋の両国は誓書をとりかわし、一〇世紀以来、一時的な友好関係をのぞき

長年にわたってつづいてきた契丹と華北政権（五代・宋）のあいだの不安定な関係に終止符が打たれた。史上に名高い澶淵の盟である。その結果、八世紀後半以後の唐の解体過程と並行して多極化がすすんでいたユーラシア東方の国際情勢は、契丹と宋という南北二大帝国が平和共存するかたちに落ち着き、以後契丹と高麗の軍事衝突や西夏の勃興といった変動要素を含みつつも、盟約による契丹（遼）・宋両国の平和友好関係を柱にして複数の国家が平和共存する状態が、一二世紀前半の女真（金）勃興にいたるまで一〇〇年あまり維持されることになる。筆者はさきに、この澶淵の盟締結にともない定められた歳幣や国境の遵守をはじめとする平和維持のための規定や、両国の擬制家族化、外交儀礼や管理貿易制度など、両国が対等な国家として共存するための仕組みと、この仕組みによってユーラシア東方で維持された複数の国家が共存する国際秩序の双方を包み込んで、「澶淵体制」と呼ぶことを提唱した。そして、その影響は金国と南宋の並立期をへて、モンゴル帝国が登場する一三世紀前半までおよぶものであったとの見通しを述べた。本報告では、前稿においてじゅうぶんな実証をともなわず、問題提起の段階にとどまっていたこの「澶淵体制」の内実をあきらかにするべく、二国間の関係が象徴的に表現される外交儀礼に着目する。具体的には、澶淵の盟締結以後、両国間で定期的に交換されるようになった外交使節たる国信使制度について、相手国への入境後の行事日程の復元、相手国皇帝とのあいだの儀礼を記した文献の読解とそれにもとづく儀礼次第の詳細の復元といった基礎作業をおこなったうえで、両国間の外交儀礼を多面的に分析し、その歴史的意義を解明していく。

3）

報告者名（所属）：枡本　哲（大阪府文化財センター）

報告タイトル：「東・西・南シベリア出土遼・金代の中国系銅鏡とその考古学文化」

ソ連崩壊以後、シベリア在住の考古学研究者による中世地域史の研究活動が顕著になってきた。各地の発掘調査で中国系銅鏡の発見される例が目立つようになったのもその成果の現われであろう。エニセイ川中流域のミヌシンスク盆地では、帝政ロシア時代以来、耕地拡大に伴う表採品がミヌシンスク博物館創設者マルチャーノフ・ニコライ・ミハイロヴィッチにより蒐集され保管されてきた。その古器物のうち 360 面以上の銅鏡（大半は現在同館所蔵）をロシアの中国学者 E.I.ルーボ・レスニチェーンコ博士が図録（1975 年刊）として公表した。以来この図録は唯一まとまったシベリア出土中国系銅鏡の参考文献となっている。そこに挙げられた鏡種はシベリア出土品のほぼ過半を網羅していたため、現在も彼の地では年代判定の根拠とされている。しかしながら発掘調査によって取り上げられた資料ではないという限界があり、どのような考古学文化の遺跡からどのような状態で出土したかについては模糊としていた。

近年、各地の考古学的発掘調査で出土状態の明らかな銅鏡資料が増加してきている。そこで本発表では、エニセイ川上流のハカス・ミヌシンスク盆地を中心とする南シベリア、アンガラ川流域とバイカル湖を中心とする東シベリアそしてオビ川中流域を中心とした西シベリア、この 3 つの地域の遼金代併行期の銅鏡を主としてとりあげた。南シベリアは中華の北方世界との関係が

比較的色濃い地域であるのに対し、他の 2 地域はいわばその周縁に位置し、在地の研究者の中には独自の中世的時代区分が必要との意見も出ている。それはスキタイ文化や古代チュルク文化に比してあまり活発でなかったシベリア中世考古学が各地で注意され、研究が推進されていることの反映でもあろう。中世は前期と後期に大きく分かれ、その間に中期をおく場合があるけれども、多くはロシア語の「発達した・熟成した」という形容詞を冠して、「発達した中世」などと表現する。後期は既に民族学者による観察や蒐集の時代と重なり、そこにはシベリア少数民族の物質文化への連続性を考古学の側からアプローチする傾向が見受けられる。要するにわが日本とは対極にあるところの多民族の連邦国家に身を置く研究者の視点が常に据えられている。

上に挙げた 3 地域のシベリアの最近の出土銅鏡の例を本発表では筆者の撮影した写真も交えて粗粗説明した。9 世紀半ばウイグルを走らせたキルギズ（黠戛斯）が故地のミヌシンスク・アバカン方面に根拠を置いたことは、S.V.キセリョフが『古代南シベリア史』（1950 年刊行）において考古学的手法をもって明らかにしたが、以後、L.R.キズラーソフらによってさらに深化され、V.V.バルトリドのいう「キルギズ大強国」が考古学的遺構・遺物の形で示されるに至る。いわゆる「キルギズ文化」で、その後半は遼代に及ぶ。ミヌシンスク盆地出土の銅鏡のうちルーボ・レスニチェーンコ分類のⅢ群（6～10 世紀中頃）とⅣ群（10 世紀中頃～13 世紀初）は、この文化を含め遼金代の銅鏡が該当するが、その数量だけで 7 割を占める。筆者のミヌシンスク博物館その他の機関での観察では、大半が中国鏡の模倣品（踏み返しも含め）で、在地の鋳造と思しき鋳張りの処理も不十分な粗悪品、失敗品も散見し、しかも表採地点の多くがかつての帝政ロシアからソ連時代にかけてのシベリア開拓の築村地点と重し、必ずしも銅鏡の全体的出土分布を反映してはいないが、それだけでも散発的に出土する他地域とは違い、ここになんらかの鋳鏡施設の存在を認めざるを得ないほどである。ハカス共和国の Ya.I.スンチュガーシェフらによって明らかにされた古代中世の農業灌漑遺構、また多くの鉄製犂頭や排土版、さらに中国銭貨の出土なども南シベリアのこの地の特異性を際立たせる。ここで確認される銅鏡の種類は、エニセイ川下流域、オビ川流域、さらにはバイカル湖西部方面にも認められ、ルーボ・レスニチェーンコの一書が今尚重宝されるゆえんである。それらの地域にはミヌシンスク博物館蔵鏡の一部がさらに模倣されているかのような節も認められ、南シベリアからより北方への拡がりを予想させる。それはシベリア考古学でいう「チュルク化」に連動する現象であろうか。

近年の発掘調査成果に照らすと、オビ川上流のアルタイ共和国やロシア共和国のアルタイ地方からバルナウル、ノヴォシビルスク、その下流のトムスク、ケメロヴォ方面では、中国鏡の模倣品に加えて、西方南ロシアあるいはカフカズ方面からの銅鏡も確認され、また鋳鏡の技法ではたとえば中国鏡の模倣品の鈕孔に金属棒を突っ込んだまま鋳造し、紐通しの孔は別に鏡体に穿つという興味深い事例が多々見られる。これは北カフカズ地方の 5～6 世紀にさかのぼって既に認められる特徴であり、まさにオビ川流域ではこれら西方と東アジアとの折衷現象を銅鏡にみることができるのである。南ロシア、ウクライナ南東のサルトヴォ＝マヤーキ文化、つまりハザールの鋳鏡の伝統にも通じるところがある。これに対してバイカル方面ではほとんど中国鏡の模倣品にとどまる。

以上の 3 地域のシベリアの中世考古学は研究者の数ほど時期区分が提唱されているといっても過言ではない。したがって報告文だけを精読しても実態はなかなか把握し難い。しかしながらそれらの錯綜する時期区分を掻い潜ってぽつぽつと出土する、特徴的な在地の中国系銅鏡のありかたが上記のような観察を通して見えてくる。わが日本に舶載された古代の中国製銅鏡に比較すれば、これらの地域の中国系銅鏡はなんとも見栄えのしない製品ではあるけれども、その破片にすら穿孔して紐通しとし、腰の革帯に結わえ、あるいは胸に抱かせ、また頭に添え、故人の遺体に副葬する埋葬儀礼の中にこそ、シベリアステップ地帯の牧民の鏡に対する特別な意識が察知される。その伝統が後世シベリア原住少数民族のシャーマン衣裳を構成するシャーマン鏡あるいは鏡形に連なっていく可能性が大きい点でも、シベリアにおける遼金代の銅鏡の出土状況は注目される。

4)-1

報告者名（所属）：荒川慎太郎（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

報告タイトル：「2008年度敦煌莫高窟・楡林窟調査報告（西夏文題記）」

2008 年 6 月、報告者は敦煌莫高窟・楡林窟を訪れ、何点かの西夏文題記を実見した。報告者の専門とする西夏語学の見地から、題記に見られる西夏文の特徴などを述べた。

両窟には、漢文、ウイグル文、チベット文、パスパ文、西夏文などによる刻文、墨書が発見され、それぞれの整理が行われてきた。西夏文題記は、かつて史金波らが録文と逐語訳を発表した（史・白 1982、史 1988）。近年も両研究者による再研究（史・白 2007）が発表されている。しかし初期の録文にはやや不備が散見され、かつ、最新の研究には録文が付されないため、西夏文題記の実際がわかりにくい。西夏文は報告者の実見により、先行研究より若干判読字を増やせた。本報告では資料として、今回未見の部分も含め、過去に報告された全ての題記について、西夏文録文と逐字訳を提示した。

報告では、はじめにいくつかの人名を検証した。西夏人名に関しては、近年の、西夏語語彙集『三才雑字』人名部分の整理（李・中嶋 1997）、仏典編纂に関係する人名目録の整理（Кычанов 1990）などの知見も有用である。「掃洒尼姑播盃氏願月明像」「傅六斤」「鮮卑」氏などについて、漢語と西夏語との対音関係も含めて論じた。

次に、西夏語学から見た題記の西夏文の特徴も紹介した。題記は文章としては短く、摩滅・欠損部分による断片化も少なくないが、西夏語に特徴的な、格標識・人称接尾辞・動詞接頭辞といった文法要素が確認できる。先行研究で触れられなかったこれらについても言及した。題記においては、１）代名詞ではなく接尾辞で人称を表すのが一般的であること、２）接頭辞は方向ではなく完了態を表示すること、などを述べた。

漢文題記では「一心供養」という表現が頻出するが、西夏文題記では「供養」ではなく「依帰（帰依）」を用いること、確認できた範囲では、「一心帰依」が楡林窟に限定されることなども指摘した。

4)-2

報告者名（所属）：向本　健（大谷大学，AA研共同研究員）

報告タイトル：「2008年度敦煌莫高窟・楡林窟調査報告（敦煌壁画部分・仏教美術）」

報告者は、2008 年 6 月に甘粛省敦煌一帯の石窟調査を実施した。本報告では、先ず調査の概要を述べ、次に西夏と敦煌にかんする先行研究について紹介する。そのうえで、各調査窟の概要と西夏との関連性について言及し、壁画についての調査結果をまとめて発表する。

（１）調査概要

日程：2008 年 6 月 3 日～6 月 8 日

参加人員：荒川慎太郎・佐藤貴保・向本健

内容：中国甘粛省西端に位置する敦煌莫高窟・安西楡林窟・安西東千仏洞における西夏関連窟を現地調査。西夏文・漢文題記・壁画内容の記録をするとともに、敦煌研究院との交流も行う。

（２）西夏敦煌先行研究

1960 年代後半より莫高窟･楡林窟における西夏窟の調査が始まる。西夏仏教美術についても(劉 1982･1990･1998)といった報告が挙げられる。日本では(藤枝 1950、前田 1959、長澤 1963、中島 1980)等、東西交渉史の観点から研究が進められてきた。

（３）各石窟の概要と壁画報告

①莫高窟

調査日：6 月 5 日。午前･午後合わせて計 10 窟を調査。現在北区全域が参観不可能となり、第 465 窟も調査できず。

調査窟：第 322 窟（西夏文墨書）・第 297 窟（西夏文刻字）・第 340 窟（西夏文（青緑の顔料にて書かれる））・第 395 窟（西夏重修の小窟）・第 285 窟（禅窟内に西夏文題記と供養者図）・第 65 窟（西夏文題記）・第 61 窟（西夏人僧侶と西夏文傍題）・第 206 窟（西夏重修）・第 148 窟（涅槃窟）・第 444 窟

②楡林窟

調査日：6 月 6 日。午後に計 8 窟を調査。南北に楡林河が走り、その両岸に石窟が開かれる。西岸は参観できず、東岸のみの調査となる。

調査窟：第 29 窟（西夏窟）・第 25 窟（西夏文題記）・第 14 窟（エチナ住人の題記）・第 15 窟（西夏時期漢文題記(＝第 16 窟)、西夏文題記）・第 16 窟（西夏時期漢文題記(＝第 15 窟)）・第 19 窟（西夏文刻字）・第 2 窟（西夏窟）・第 3 窟（西夏窟）

③東千仏洞

調査日：6 月 6 日。午前に計 4 窟を調査。鎖陽城よりさらに東に進んだ渓谷の両岸に石窟が開かれる。莫高窟や楡林窟と比べると、全 8 窟と小規模ではあるが、西夏仏教文化を知る上で重要な石窟が存在する。

調査窟：第 2 窟（西夏窟）・第 5 窟（西夏窟）・第 6 窟・第 7 窟（西夏窟）

＊2008 年６月の中国甘粛省敦煌における現地調査は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究」（代表：荒川慎太郎）によるものである。

5）

報告者名（所属）：飯山知保（東洋文庫）

報告タイトル：「ハーバード大学での中国社会史研究の現状」

報告者は機会を得て 2008 年 5 月から 2009 年 3 月までハーバード燕京研究所（Harvard-Yenching Institute）に滞在し、東アジア言語文化学部でのゼミや講義に出席してきた。今回の報告では、そこでの知見をふまえ、とくにハーバード大学における宋代以降の中国社会史研究の現状と傾向について、感じたことを述べた。

周知の通り、ハーバード大学の東アジア言語文化学部（Department of East Asian Languages and Civilizations）は、同大学の歴史学部、フェアバンクセンター、ライシャワー研究所、ハーバード燕京研究所とともに、ハーバード大学における東アジア研究の中核を形成している。さらに、ハーバード大学はプリンストン大学などと並び、アメリカにおける最大規模の中国史研究の拠点でもあり、これまでにも同学部には、アメリカのみならず世界各地から著名な研究者が招かれ、教鞭を執ってきた。彼らの研究は欧米において絶大な影響力を持ち、さらにはアジアでの研究動向にも多大な影響を与えている。このため、ハーバード大学には、中国をはじめとする世界各国から研究者が多数訪れ、積極的な学術交流が行われている。

本報告ではとくに、現在の同学部を代表する中国史研究者であるピーター・ボル（Peter K. Bol）氏と、将来を嘱望される若手教授のマイケル・ソニー（Michael A. Szonyi）氏の最新の研究や、彼らが主催する現在進行中の国際共同プロジェクトに焦点を当てた。

簡潔にまとめるならば、ボル教授は、故ロバート・ハートウェル教授など、前の世代の研究者からの問題関心を継承し、China Biographical Database と China Historical GIS という大型国際プロジェクトを通じて、中国宋代以降の社会変動を「ネットワーク」とその変遷という観点から分析することに注力している。一方、社会の諸場面における伝統・規範の実践の緻密な再構成から、「国家－社会」「儒学文化－民間信仰」といった従来の研究の枠組みを再検討するソニー教授は、単一の枠組みに収斂する「中国社会」像を否定し、徹底的なフィールドワークからその地方に根ざした基本資料（口述資料を含む）を発掘している。

このふたりの教授の研究方法の差異は、単に個々人の視野の違いというよりも、アメリカの中国史研究者の世代間の研究志向の差異ととらえるべきかと思われる。周知のとおり、1980 年代の改革開放政策の実施以降、外国人研究者が直接中国に赴いて調査を行うことが基本的に可能となった。これに対応する形で、日本でも現地調査が盛んに行われているが、アメリカでも研究の機軸が現地調査に移行しており、中国の研究機関・研究者との協力関係が積極的に模索されている。おそらく今後は、アメリカ・中国共同のプロジェクトが行われる機会がますます増えること

が予測される。日本を拠点とする研究者として、そうした動きにいかに反応してゆくべきかは、これから自らの研究を幅広く国外に発信してゆく上で重要ではないかと思われる。

6）

報告者名（所属）：坂尻彰宏（大阪大学）

報告タイトル：「朝貢、貿易、あるいは投資――9・10世紀敦煌の使節派遣――」

中華王朝と諸外国との間の朝貢は、政治的な秩序を確認し合う儀式であると同時に、一種の貿易であったと言われている。それは、外国の使節がもたらした朝貢品に対し、中華王朝の皇帝からその価値をはるかに上回る回賜品が「対価」として支払われていたと見なされるからである。そして、こうした朝貢品と回賜品との「価格差」が生み出す莫大な利益や朝貢に付随する私的な貿易などが、朝貢に対する諸外国の経済的動機となっていたと考えられている。

では、実際にどれほどの利益が朝貢を行った側に生じたのであろうか。また、こうした利益を生む機会に対し、貢納者たちはどのように参加し、利益を得ていたのであろうか。こうした疑問は朝貢の政治的・経済的側面を考える上で基礎となるものであるが、それに答えるための具体的な情報はほとんど与えられていないのが現状である。

そこで、本報告では９・１０世紀における敦煌の帰義軍節度使政権の事例を紹介し、文書史料を使用して、実際に朝貢がどれほど、どのように「儲かった」のかを検討した。帰義軍節度使政権は９世紀後半～１１世紀前半に敦煌（沙州）を中心に成立した独立政権であり、この政権の歴代首長は中原の中華王朝との朝貢関係を維持し、形式的に節度使の称号を得ていた。本報告では、９世紀末に長安の帰義軍側出先機関（上都進奏院）から敦煌に送られた報告書（Pelliot chinois 3547）を分析し、朝貢品や回賜品などの授受について数量をあげて紹介した。また、関連する帳簿や契約文書を利用して、朝貢がもたらす利益の大きさやその分配について検討した。その結果、朝貢品に対する回賜品、追加の賜物、交通費（駝馬価絹）を合わせると帰義軍側の利益は、持参した貢物の数十倍に及んだことが明らかになった。また、このような朝貢活動には節度使や使節だけでなく、その他の帰義軍主要メンバーも参加しており、おのおの貢物を「投資」することによって、大きな利益を上げていたこともうかがい知ることができた。つまり、この時期の帰義軍節度使政権からの朝貢は、それに関わる人びとにとって非常に「儲かる」事業であったといえる。